

光産業創成大学院大学  
自己点検・評価の検証結果報告書



令和3年12月  
光産業創成大学院大学  
外部評価委員

# 目 次

1	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2	検証結果のまとめ	
2-1	光産業創成大学院大学が特に優れていると評価できる事項	2
2-2	改善する必要があると思われる事項	3
2-3	今後の本学に期待すること	5
3	各委員の検証結果報告	
3-1	梅村和夫委員(座長)	7
3-2	山中淳平委員	8
3-3	岡部比呂男委員	10
3-4	安形秀幸委員	12
4	「外部評価を受けて」所見・今後の方向	14
	(添付)	
1	外部評価委員会議事要旨	16
2	外部評価委員会委員名簿	18

## 自己点検・評価の検証結果報告書

梅村 和夫 委員 (座長)  
(浜松医科大学副学長 (教育担当))

### 1. はじめに

学校法人光産業創成大学院大学自己評価規程（以下「自己評価規程」という）及び内部質保証に関する細則に基づき「自己評価書」が令和3年9月に作成された。本外部評価委員は、自己評価規程に基づき、第三者評価として同自己評価書を検証し、自己点検・評価の検証結果報告書としてとりまとめた。

第三者評価として検証するため、令和3年11月2日に同大学キャンパスにて、外部評価委員会が開催された。

座しての会議の前に大学施設の視察が行われ、外部評価委員全員で研究実験室（バイオフォトニクスデザイン分野）及び起業ルームを担当教員の説明を受けながら見学した。

その後、瀧口学長と担当の教員から自己点検結果等の概要説明があり、続いて、外部評価委員との質疑応答が行われた。

引き続き、意見を集約するために、外部評価委員のみで議論を行った。

最後に座長から、外部評価委員の意見集約の結果を口頭にて伝えて、会議は解散となった。

その後、各外部評価委員は、

1. 本学が特に優れていると評価できる事項
2. 改善する必要があると思われる事項
3. 今後の本学に期待すること

の3点についてのコメントを書類にて作成し、事務局に提出した。このコメントを座長が集約し、検証評価報告書（案）を作成した後に、各委員による精査を経て本報告書は作成された。

## 2. 検証結果のまとめ

### 2-1 本学が特に優れていると評価できる事項

(1) 建学の精神として、「光技術を中心としたニーズとシーズの融合により、新産業を創成しうる人材を養成する」ことを掲げており、それに基づいたディプロマポリシー、カリキュラムポリシーを策定して、実践している。

学生は光技術で社会課題を解決する研究に取り組み、在学中の起業や派遣元企業での新事業開発につなげることを目的に入学し、大学は新産業創成のためのカリキュラムを設定し、アントレプレナーやイントレプレナー人材を輩出することを目的に、光関連技術と経営を融合した独自の教育を提供しており、従来の日本の大学が担ってこなかった独自の役割を果たしている。

入学定員10名の小規模な大学であるが起業数は既に30社を超え、その実績は全国の大学の中でも上位に位置しており、他に類を見ない尖端的かつ独創的な大学である。

(2) 多くの卒業生が起業され、新産業に関わる人材が輩出され、独創的な事業を興して社会で活躍しており、目的とする人材養成が確実に行われている。

また、卒業生に対して、起業や経営改革への継続的なサポート（本学ウェブサイトやニュースレターでの社業紹介、卒業後の技術相談・援助、教員の経営参画など）を積極的に行っている。卒業生が経営する企業のウェブサイトに、本学との協業についてのポジティブな記述が多く見受けられることに加え、各社のビジネスプランに戦略性の向上など進化の跡が窺える。

(3) 令和2年4月に新たにバイオフィotonicsデザイン分野を設立したり、ビジネスコンテストを開催したりして、入学者を増やす努力をしている。

ビジネスコンテスト「フォトンicsチャレンジ」の実施は、ユニークで素晴らしい取り組みである。本学から学外に向けて、ビジネスコンテストの取り組みを積極的に発信することにより、起業をめざす人材との接点生まれ、明確なビジネスプランのアイデアを持った入学志望者の増加が見込めるものと推察する。

また、前回の外部評価委員会の指摘事項である「持続的入学者の確保」に向けた取り組みであり、結果として「バイオフィotonicsデザイン分野」に令和2年度3名の入学に至っており、指摘に対応する新たな取り組みを迅速に行っている。

同様にこれまでの外部評価で、国の内外への幅広い広報活動を望む意見があったと思われるが、近年はピッチ会を多数実施されて情報発信に努めている。また、ピッチ会での優秀者に入学料、授業料の学費免除の特典を付与するなど、受け入れる制度を構築され、新入生獲得に直接役立てられている。

- (4) 静岡県内の産学の機関との密接な連携協力体制を構築されている。また、連携の特色を活かし、医療・生物学と光学の境界領域での起業を目指すバイオフィotonicsデザイン部門を新設された。
- (5) 確かな経営基盤と堅実な経営による安定性や継続性に加えて、バイオフィotonicsなど特に強化する領域を明示している。同領域で実績のある客員教官の採用などで体制を増強するとともに、外部機関と協力した公開講座の開催など、積極的な取り組みが行われている。
- (6) 産業創成につながる企業との共同研究の件数は増加しており、競争的資金の獲得についても増減はあるものの、毎年一定の成果を上げている。教員の積極的な研究活動や地域及び産業界との連携強化に向けて取り組んでいる。
- (7) 経済産業省の委託事業でスタートした、ものづくり企業の中核技術者の育成を目的とした「レーザーによるものづくり人材育成講座」では、11年間で371名の受講者を輩出している。また国の多くの公募事業についても地域の大学や行政、企業と連携し採択を受けるなど、新産業の創成に向けての産学官の取り組みには必要不可欠な大学と位置付けられており、その役割と期待感は年々大きくなっている。

## 2-2 改善する必要があると思われる事項

- (1) 光技術を活用した新たなビジネスモデルの構築により起業する学生を輩出し、新産業の創出につなげていくことが、本学の趣旨や目的を達成するための最重要課題である。開学時には入学定員15名でスタートし、平成24年度から10名に変更すると同時に「新事業開発コース」を加え、定員充足に努めた。

令和2年度には新たに「バイオフィotonicsデザイン分野」を設置し一定の成果を上げているが、定員充足には至っていない。

また入学者のうち「新事業開発コース」を選択する学生が多く、起業家を目指す「起業実践コース」を選択する学生が少ないことも課題である。今後は、ベンチャー起業を目指す入学者を増やすべきである。

なお、県内からの入学者が約6割を占めているが、定員確保には優秀な学生を全国から集める必要があり、令和元年度にスタートした「Photonics Challenge」を含めて、国内外への情報発信や広報戦略の一層の工夫と強化が必要と考える。

(2) それぞれの学生に対する丁寧な指導が評価される一方で、多くの成長の種を見つけて育てていくためには、より多くの有望な新入学生を受け入れることが必要である。長期履修を選択する学生の増加によって標準修業年限（あるいは年限×1.5）内での終了率の低下が避けられないのであれば、就学制度の再整備などによって入学の枠数を確保し、新入学生の受け入れを促進することが重要である。

志願者数≒入学者数、入学定員充足率 60～70%、収容定員充足率 100%超という現状を、志願者数>入学者数、入学定員充足率 100%、収容定員充足率 100%という状態に如何にして近づけるか、制度の見直しや指標の再定義も含め、改善の余地がある。

また、学生への教育研究活動は組織的に取り組むことが重要であり、内部質保証において、体制を整備し、点検の手順を明確化すべきである。

(3) 教員・学生において、企業や大学との連携やネットワークを強化し、シーズを生かした共同研究をさらに活性化すべきである。

(4) 本学の事業活動収入の大きな柱が企業からの寄附金に依ることから、光産業分野でのアウトプットが重要であることは当然であるが、経営の安定性や継続性の観点からは、授業料収入や外部との共同研究等による資金調達の拡大も重要である。

(5) 現在、全国的な広報展開を図っているが、アカデミックな発表内容に関しては、関係学会や様々な産学官の連携イベント（JST 主催の展示会など）で、一層多くの研究発表をすれば、広報にも役立つ。

所属企業との非公開の共同研究や、また起業に向けた機密事項も多いが、外部発表可能な内容については一層の発表を検討すべきである。

なお、貴学からの情報発信はインターネットの活用等により順調に進んでいるようだが、それに加えて、新産業創出を目指す全国の自治体・産業支援機関・金融機関などに対しては、より積極的かつ多面的なアプローチで貴学の存在をアピールしていくことが必要である。

(6) 起業実践コースと新事業開発コースの2つが設けられており、新産業創成の起業による実現を目指す学生に加え、所属先での研究開発に貴学のカリキュラムを役立てる学生についても受入体制を整えられている。いずれも、研究教育の理念には共通するものがあるが、必要性を検討したうえで両コースの特徴を、アドミッション、カリキュラム、ディプロマの3ポリシーに記載された方が良い。大学ホームページを見て入学を検討する者にも、記載があった方が分かり

やすい。

- (7) 静岡大学と単位互換の協定を締結しているが、残念ながら実績がない。「バイオフィotonicsデザイン分野」を設置したことを機に、新たに浜松医科大学との単位互換制度を設けるなど今後の積極的な利用促進を図り、研究活動の活性化につなげていく必要がある。

### 2-3 今後の本学に期待すること

- (1) 新設したバイオフィotonicsデザイン分野へ入学する学生を増やし、医療機器や医療検査機器に係わる新産業が創出されることを期待する。

さらに、今後の高齢化者化に向けて、在宅の医用機器の開発など、近い将来に重要となる技術が含まれると思われ、益々の発展を期待する。

- (2) 新産業創成が成し遂げられるように、卒業後フォローアップ体制を充実させることを期待する。貴学から光技術を活用した「ベンチャー企業」が次々に興り、国内外で競争力を有する企業に成長していくことを期待する。

- (3) ビジネスコンテストなどのイベントを活用して、起業を目指した入学者をさらに増やしていくことを期待する。また、その入学生を特色ある貴学のカリキュラムのもとで研鑽を積ませ、起業家として輩出されることを期待する。

起業実践コースの学生比率の向上にむけた様々な取り組みを、今後も継続することを期待する。

また、企業からの派遣学生が研究開発した新規事業の拡大により、新たな産業の創生につながっていくことを期待する。

さらに、ビジネスコンテストの様な外部への働きかけによって、国内外において本学の認知度向上につながる好循環を期待する。

- (4) 起業には、新産業の創成に繋がる、独自の発想を生み出す力が重要である。貴学はそのような独自の発想にもとづいて建学されたものであり、起業のノウハウでなく、起業に重要な物の見方、考え方などを講演会などの形で外部に情報発信することを期待する。

- (5) 長引くコロナ禍で海外との交流が難しい状況が続いているが、コロナ禍を克服した後は、積極的な交流が行われることを期待する。

「浜松光宣言2013」のフォロー、ブラッシュアップに本学が積極的に参画・

貢献し、存在感を発揮することを期待する。

(6) 地域の他大学や産業界との更なる連携により、光と医療（機器開発）、光と輸送機器（特に自動運転、EV など今後の成長が見込まれる領域）などの分野での先進的な研究、事業化を期待する。

(7) 創立当初から株式会社浜松ホトニクスの大口径寄付が運営収入の大半を占めているが、将来的には卒業生が興した企業や学生を派遣した企業からの寄付により大口依存比率が下がり、また貴学が中心になり、起業家や投資家、専門家等が集積するベンチャーエコシステムが形成されていくことを期待する。



### 3. 各委員の検証結果報告

#### 検証結果報告

委員名 梅村 和夫

##### 1 本学が特に優れていると評価できる事項

(1) 建学の精神として、「光技術を中心としたニーズとシーズの融合により、新産業を創成しうる人材を養成する」ことを掲げており、それに基づいたディプロマポリシー、カリキュラムポリシーを策定して、実践している。

(2) 多くの卒業生が起業され、社会で活躍しており、目的とする人材養成が確実に行われている。

(3) 新たにバイオフィotonicsデザイン分野を設立したり、ビジネスコンテストを開催したりして、入学者を増やす努力をしている。

##### 2 改善する必要があると思われる事項

(1) ベンチャー起業を目指す入学者を増やすべきである。

(2) 内部質保証において、体制を整備し、点検の手順を明確化すべきである。

(3) 教員・学生において、企業や大学との連携やネットワークを強化し、シーズを生かした共同研究をさらに活性化すべきである。

##### 3 今後の本学に期待すること

(1) 新設したバイオフィotonicsデザイン分野へ入学する学生を増やし、医療機器や医療検査機器に係わる新産業が創出されることを期待する。

(2) 新産業創成が成し遂げられるように、卒業後フォローアップ体制を充実させることを期待する。

(3) ビジネスコンテストなどのイベントを活用して、起業を目指した入学者をさらに増やしていくことを期待する。

## 検証結果報告

委員名 山中 淳平

---

### 1 本学が特に優れていると評価できる事項

- (1) 本学の建学理念に従い、新産業創成のためのカリキュラムが設定されていることは、他に例を見ない独創的なもので、特に高く評価できる点であると思います。またその結果、新産業に関わる人材を輩出され、多くの卒業生が独創的な事業を興して活躍されていることが、本学の最も優れた点であると思います。
- (2) これまでの外部評価で、国の内外への幅広い広報活動を望む意見があったと思われませんが、近年はピッチ会を多数実施されて情報発信に努めておられ、この点も優れた点であると考えます。また、ピッチ会での優秀者を学費免除で受け入れる制度を構築されているなど、新入生獲得に直接役立てられていることも高く評価できると考えます。
- (3) 静岡県内の産学の機関との密接な連携協力体制を構築されています。また、連携の特色を活かし、医療・生物学と光学の境界領域での起業を目指すバイオフォトニクスデザイン部門を新設されています。このような、地域との連携が活用されていることも優れた点であると思います。

### 2 改善する必要があると思われる事項

- (1) 起業実践コースと新事業開発コースの2つが設けられており、新産業創成の起業による実現を目指す学生に加え、所属先での研究開発に本学のカリキュラムを役立てる学生についても受入体制を整えられていると思います。いずれも、研究教育の理念には共通するものがあると思いますが、(必要があれば)両コースの特徴を、アドミッション、カリキュラム、ディプロマの3ポリシーに記載された方が良いかと思います。大学ホームページを見て入学を検討する者にも、記載があった方分かりやすいかと思います。
- (2) 現在、全国的な広報展開を図っておられますが、アカデミックな発表内容に関しては、関係学会や様々な産学官の連携イベント(JST主催の展示会など)で、一層多くの研究発表をされれば、広報にも役立つかと思われます。所属企

業との非公開の共同研究や、また起業に向けた機密事項も多いかと推察しますが、外部発表可能な内容については一層の発表を検討されてはと思います。

### 3 今後の本学に期待すること

- (1) 今後も、特色ある本学のカリキュラムのもとで研鑽を積まれた起業家を輩出されることを期待いたします。起業実践コースの学生比率の向上にむけた様々な取り組みを、今後も継続いただきたいと思います。
- (2) 新設のバイオフィotonicsデザイン部門は、今後の高齢化者化に向けて、在宅の医用機器の開発など、近い将来に重要となる技術が含まれると思われ、益々の発展を期待いたします。
- (3) 起業には、新産業の創成に繋がる、独自の発想を生み出す力が重要かと思えます。本学はそのような独自の発想にもとづいて建学されたものと思えます。起業のノウハウでなく、起業に重要な物の見方、考え方などを、可能でしたら（講演会などの形でも）外部発信いただければと思います。

## 検証結果報告

委員名 岡部 比呂男

---

### 1 本学が特に優れていると評価できる事項

- (1) 卒業生に対して、起業や経営改革への継続的なサポート（本学ウェブサイトやニュースレターでの社業紹介、卒業後の技術相談・援助、教員の経営参画など）を積極的に行っていることが、高く評価できます。卒業生が経営する企業のウェブサイトに、本学との協業についてのポジティブな記述が多く見受けられることに加え、各社のビジネスプランに戦略性の向上など進化の跡が窺えます。
- (2) 確かな経営基盤と堅実な経営による安定性や継続性に加えて、バイオフォトンクスなど特に強化する領域を明示している点が優れています。同領域で実績のある客員教官の採用などで体制を増強するとともに、外部機関と協力した公開講座の開催など、積極的な取り組みが行われています。
- (3) ビジネスコンテスト「フォトンクスチャレンジ」の実施は、ユニークで素晴らしい取り組みと評価します。本学から学外に向けて、ビジネスコンテストの取り組みを積極的に発信することにより、起業をめざす人材との接点が生まれ、明確なビジネスプランのアイデアを持った入学志望者の増加が見込めるものと推察します。

### 2 改善する必要があると思われる事項

- (1) それぞれの学生に対する丁寧な指導が評価される一方で、多くの成長の種を見つけ育てていくためには、より多くの有望な新入学生を受け入れることが必要と思われます。長期履修を選択する学生の増加によって標準修業年限（あるいは年限×1.5）内での終了率の低下が避けられないのであれば、就学制度の再整備などによって入学の枠数を確保し、新入学生の受け入れを促進することが重要と思われます。

志願者数＝入学者数、入学定員充足率 60～70%、収容定員充足率 100%超という現状を、志願者数＞入学者数、入学定員充足率 100%、収容定員充足率 100%という状態に如何にして近づけるか、制度の見直しや指標の再定義も含め、改善の余地があると思われます。

- (2) 本学の事業活動収入の大きな柱が企業からの寄附金に依ることから、光産業分野でのアウトプットが重要であることは当然ですが、経営の安定性や継続性の観点からは、授業料収入や外部との共同研究等による資金調達の拡大も重要と考えます。
- (3) 本学からの情報発信はインターネットの活用等により順調に進んでいるように思いますが、それに加えて、新産業創出を目指す全国の自治体・産業支援機関・金融機関などに対しては、より積極的かつ多面的なアプローチで本学の存在をアピールしていくことが必要と思われます。

### 3 今後の本学に期待すること

- (1) 長引くコロナ禍で海外との交流が難しい状況が続いていますが、コロナ禍を克服した後は、積極的な交流が行われることを期待します。「浜松光宣言2013」のフォロー、ブラッシュアップに本学が積極的に参画・貢献し、存在感を発揮することが望まれます。
- (2) ビジネスコンテストの様な外部への働きかけによって、本学への入学を志望する起業家やその出身企業の枠が広がり、国内外において本学の認知度向上につながる好循環を期待します。
- (3) 地域の他大学や産業界との更なる連携により、光と医療（機器開発）、光と輸送機器（特に自動運転、EV など今後の成長が見込まれる領域）などの分野での先進的な研究、事業化を期待します。

## 検証結果報告

委員名 安形秀幸

### 1. 本学が特に優れていると評価できる理由

#### (1) 他大学にない尖端的な教育と成果

学生は光技術で社会課題を解決する研究に取り組み、在学中の起業や派遣元企業での新事業開発につなげることを目的に入学し、大学はこうした新産業を創出するアントレプレナーやイントレプレナー人材を輩出することを目的に、光関連技術と経営を融合した独自の教育を提供しており、従来の日本の大学が担ってこなかった独自の役割を果たしている。

入学定員10名の小規模な大学であるが起業数は既に30社を超え、その実績は全国の大学の中でも上位に位置しており、他に類を見ない尖端的な大学として高く評価できる。

#### (2) 社会貢献

経済産業省の委託事業でスタートした、ものづくり企業の中核技術者の育成を目的とした「レーザーによるものづくり人材育成講座」では、11年間で371名の受講者を輩出している。また国の多くの公募事業についても地域の大学や行政、企業と連携し採択を受けるなど、新産業の創成に向けての産学官の取り組みには必要不可欠な大学と位置付けられており、その役割と期待感は年々大きくなっている。

#### (3) 企業との共同研究の増加、競争的研究資金の獲得

産業創成につながる企業との共同研究の件数は増加しており、競争的資金の獲得についても増減はあるものの、毎年一定の成果を上げている。教員の積極的な研究活動や地域及び産業界との連携強化に向けた取り組みの結果であり、高く評価できる。

#### (4) 外部評価委員会の指摘事項（H31年4月）に対する迅速な対応

「持続的入学者の確保に向けて、コース内容の改革・新設や学生募集のための社会へのアクションの方法に新たな工夫が必要」「静岡県西部地域以外からの入学生受け入れ増加」という指摘に対し、令和元年度から新たにビジネスプランコンテスト「Photonics Challenge」を開催し、優秀受賞者に入学料、授業料免除の特典を付与するなど、学生獲得につながるプロジェクトをスタートした。また令和2年4月には、新たに「バイオフィotonicsデザイン分野」を設置し、学生を確保するために積極的なPRに努め、令和2年度には3名の入学に至っている。指摘に対応する新たな取り組みを迅速に行っている点が高く評価できる。

## 2. 改善する必要があると思われる事項

### (1) 学生の確保

光技術を活用した新たなビジネスモデルの構築により起業する学生を輩出し、新産業の創出につなげていくことが、本学の趣旨や目的を達成するための最重要課題である。開学時には入学定員15名でスタートしたが、平成24年度から10名に変更すると同時に「新事業開発コース」を加え、定員充足に努めた。令和2年度には新たに「バイオフォトニクスデザイン分野」を設置し一定の成果を上げているが、定員充足には至っていない。

また入学者のうち「新事業開発コース」を選択する学生が多く、起業家を目指す「起業実践コース」を選択する学生が少ないことも課題である。県内からの入学者が約6割を占めているが、定員確保には優秀な学生を全国から集める必要がある。令和元年度にスタートした「Photonics Challenge」を含めて、国内外への情報発信や広報戦略の一層の工夫と強化が必要と考える。

### (2) 単位互換制度の活用

静岡大学と単位互換の協定を締結しているが、残念ながら実績がない。「バイオフォトニクスデザイン分野」を設置したことを機に、新たに浜松医科大学との単位互換制度を設けるなど今後の積極的な利用促進を図り、研究活動の活性化につなげていく必要がある。

## 3. 今後の本学に期待すること

(1) 本学から光技術を活用した「ベンチャー企業」が次々に興り、国内外で競争力を有する企業に成長していくことを、また企業からの派遣学生が研究開発した新規事業の拡大により、新たな産業の創生につながっていくことを期待しております。

(2) 創立当初から株式会社浜松ホトニクスの大口寄付が運営収入の大半を占めておりますが、将来的には卒業生が興した企業や学生を派遣した企業からの寄付により大口依存比率が下がり、また本学を中心に起業家や投資家、専門家等が集積するベンチャーエコシステムが形成されていくことを期待しております。

#### 4. 「外部評価を受けて」 所見・今後の方向

光産業創成大学院大学  
自己点検・評価委員会

自己評価書に基づき、外部評価委員による評価をいただいた。この外部評価を受けての、所見と今後の方向をまとめた。

##### 1 所見

- ・建学の精神に基づいたディプロマポリシー、カリキュラムポリシーを策定して、実践していることを評価いただいた。また、新産業創成のためのカリキュラムを設定し、アントレプレナー及びイントレプレナー人材を輩出するため独自の教育を提供していることを評価いただいた。
- ・多くの卒業生が起業し、新産業に関わる人材が輩出され、独創的な事業を興して社会で活躍するなど、目的とする人材養成が確実に行われている点を評価いただいた。
- ・新たにバイオフォトニクスデザイン分野を設立し、ビジネスコンテストを開催するなど入学者を増やす取組みを評価いただいた。
- ・産業創成につながる企業との共同研究や地域及び産業界との連携強化に向けた取組みを評価いただいた。
- ・レーザーによるものづくり人材育成講座の地域社会への貢献活動を評価いただいた。
- ・ベンチャー起業を目指す入学者を増やす努力や情報発信や広報戦略の工夫と強化についてご指摘いただいた。
- ・より多くの有望な新入学生受入れのため、標準修業年限内での修了に向けて改善の必要性をご指摘いただいた。
- ・学生への教育研究活動の組織的な取組みと内部質保証の体制と点検手順の明確化についてご指摘いただいた。
- ・企業や大学との連携やネットワークを強化し、シーズを生かした共同研究の活性化に向けてご指摘いただいた。
- ・新産業創出を目指す全国の自治体、産業支援機関及び金融機関などに研究発表や多目的のアプローチを行い、本学の存在をアピールする必要性をご指摘いただいた。
- ・他大学との単位互換制度の積極的な利用促進と研究活動の活性化に向けてご指摘いただいた。
- ・バイオフォトニクスデザイン分野の入学生増と医療機器等に関わる新産業創出に期待が寄せられた。
- ・卒業後のフォローアップ体制の充実により、光技術を活用した「ベンチャー企業」が国内外で競争力を有する企業に成長していくよう期待が寄せられた。



- ・ビジネスコンテストなどのイベントを活用し、起業を目指した入学者をさらに増やし、特色あるカリキュラムのもとで研鑽を積ませ、起業家として輩出されることに期待が寄せられた。
- ・企業からの派遣学生が研究開発した新規事業の拡大により、新たな産業の創成につながっていくことに期待が寄せられた。
- ・本学が中心となり、起業家や投資家、専門家等が集積するベンチャーエコシステムが形成されることに期待が寄せられた。

## 2 今後の方向性

外部評価委員から優れていると評価いただいた事項については、今後も継続して努力し、さらに伸ばしていく所存です。

改善が必要とご指摘いただいた事項に対して、課題の確認と対応を検討するとともに、本学へのご期待に沿えるよう次期中期計画期間中の課題解決に向けて、中期計画及び年度計画に対応策を盛り込むなどしたうえで、関係部署を中心に実効性のある方策により着実に実施してまいります。

本学は、自己評価書等の検証結果を受け、今まで以上に、理事長、学長のリーダーシップのもと、建学の精神に基づき、世界に類のない理念を持つ大学院大学として、教育、研究、光産業創成に向けて、日々精進していく所存です。

(添付1)

## 光産業創成大学院大学外部評価委員会議事要旨

1. 日 時 令和3年11月 2日(火) 13時15分～16時10分
2. 場 所 光産業創成大学院大学 会議室1
3. 出席者 梅村和夫委員 (国立大学法人浜松医科大学副学長)  
山中淳平委員 (名古屋市立大学大学院薬学研究科・  
薬学部生命分子薬学講座教授)  
岡部比呂男委員 (浜松交響楽団 理事長)  
安形秀幸委員 ((株) 浜名湖国際頭脳センター 常勤監査役)  
大学側 瀧口学長、増田自己点検・評価委員会委員長、  
内藤自己点検・評価委員会委員、花山自己点検・評価委員会委員、平野自  
己点検・評価委員会委員、楠本自己点検・評価委員会委員  
大木事務局長、葛山シニアマネージャー、菅沼事務員
4. 議事等  
開会
  - (1) 学長挨拶 瀧口学長から挨拶があった。
  - (2) 出席者紹介 大学側の出席者について、自己紹介があった。
  - (3) 学内視察 研究実験室、起業ルームを視察  
バイオフィotonicsデザイン分野の内藤先生の実験室及び起  
業ルームを視察した。
  - (4) 座長の選出 梅村和夫委員を座長に選出した。
  - (5) 自己点検評価結果の概要説明(梅村座長により進行)  
瀧口学長から本学の概要について説明があった後、増田自己点検・評価委  
員会委員長から、自己評価書に基づき、Ⅰ大学の現況、目的及び特徴、Ⅱ基  
準ごとの自己評価について、それぞれ説明があった。
  - (6) 質疑応答
    - ①光産業創成大学院大学の特徴及び今後の方向性について
    - ②入学者の状況について
    - ③起業、技術開発、コース分け、企業との共同研究について
    - ④修業年限の状況について
    - ⑤ビジネスコンテストの波及効果等について

- ⑥学生等の起業の状況、大学のシーズと起業との結び付けについて
  - ⑦内部質保証に係る責任者と情報共有する組織について
  - ⑧内部質保証の体制と手順について
  - ⑨新型コロナが本学におよぼした影響（メリットとデメリット）について
- などについて、質疑応答を行った。

(7) 外部評価委員会からの意見（質疑応答の後、意見集約（座長より））

- ①ビジネスコンテストの活用と入学者増への期待
- ②教員の企業等との連携やネットワークの強化
- ③バイオフィotonicsデザイン分野の新産業への期待
- ④ベンチャー起業を目指す学生増への期待

なお、各委員の検証結果報告を集約し、最終的に報告書を作成することとした。

(8) 連絡事項等今後の日程

増田自己点検・評価委員会委員長から、今後の予定について説明があった。

- ①「検証結果報告」の提出（各委員） 締め切り 12月3日（金）
- ②「検証結果のまとめ」 12月下旬（座長と打合せ）
- ③「外部評価報告書案の各委員への提示」 1月中旬～下旬

閉会 学長挨拶

以 上

(添付2)

外部評価委員会委員名簿

(敬称略、○印は座長)

- 梅村 和夫  
浜松医科大学副学長
  
- 山中 淳平  
名古屋市立大学大学院薬学研究科・薬学部生命分子薬学講座教授
  
- 岡部 比呂男  
浜松交響楽団 理事長(元浜松地域イノベーション推進機構理事長)
  
- 安形 秀幸  
(株) 浜名湖国際頭脳センター 常勤監査役



